

指定討論

安田裕子

(立命館大学衣笠総合研究機構)

安田裕子

指定討論をさせていただきます。まず、このワークショップにおける重要なポイントを再確認しておきましょう。1つは、発達変容を、とりわけシステムという視点を入れ込んでどのように捉えることができるか、ということでした。そしてもう1つは、システムとして捉えることで何が見えてくるかを考えてみる、ということでした。TEMは、システム論に依拠し、とりわけ時間的なプロセスのなかで捉えることを得意とする方法論ですが、そうした手法を用いたことの利点は何かという観点から、簡潔に質問をさせていただきます。

番田先生は、システムを、実践コミュニティへの関与の有り様として捉えておられるのだと理解しました。そして、既に大学を卒業して社会人になっている方と卒業を控えている4年生の方の2つの層を対象とし、当事者の方々が、学生時代に実践コミュニティに関与していたことが、どんなふうにトランジション（transition）に影響しているかという観点からのご発表でした。

一方で、対象者のうち社会人の方は、社会に出ることによってさらなる実践コミュニティが立ち上がるわけでした、そうした新たな実践コミュニティとの出会いを通じて気づきがあったり価値観の変容があったりするのではないかと、思いました。ご発表では、学生時代における実践コミュニティへの関与に焦点があてられていましたが、社会人の方について、その変容の語りに、社会に出てからの実践コミュニティにおける価値の更新が影響しているのかどうか、影響しているとすれば、それは具体的にどのように語りに反映されているのか、ということについておうかがいしたいと思います。

和田先生は、きょうだいというシステムに焦点をあてて、ひきこもりを抱える家族においてきょうだいが自律していくプロセスを捉えられておられました。そして、きょうだいが変容していくありさまを、4期に区分してまとめておられました。第4期目においては、「終わりが見えない」という語りがあったように、ある種の停滞が明らかにされていましたが、変容しつつも停滞する

ということ、停滞しながらも変容していく有り様、まさにひきこもりの渦中であるがゆえでしょう。これからもこのように揺らぎながら変容していくのだろうと推測しますが、ひきこもりを抱える家族におけるきょうだいが自律していくプロセスの全体像において、本発表で明らかにされた過程はどういう局面にあると考えられるでしょうか。和田先生にはこのことについておうかがいしたいと思います。

廣瀬先生は、システムを、家族や社会の有り様として捉えておられました。そして、ひきこもっている当事者の「社会」再接続に何が鍵となるかを、本人への「家族」の関わりを軸に分析しておられました。その結果から、2つのことが重要であると理解しました。それは1つに、家族が本人と「会話ができるようになった」ことであり、もう1つは、家族が本人の「コミットメントをキャッチできた」ことだったかと思います。とりわけ、本人のコミットメントを家族が「キャッチできたかどうか」という点が重要であると考えました。しかし一方で、ひきこもっている本人が、「免許を取りにいこう」であるとか「アルバイトをしよう」ということを口にしたとしても、それが実行には移されにくかったり、あるいはたとえ行動したとしても、1週間でアルバイトをやめてしまったり、免許を取ろうにも意欲が続かず取得できない、ということが実際に少なくはないように思います。このように、やる気をみせては長続きしないということが繰り返されることもあるなかで、家族は、またか…一生懸命関わっても結局は続かない…頑張っても期待しても裏切られてしまう…と疲れてしまったり無力感に陥ったりし、本人に対するマイナスの評価を強めてしまいかねないことがあるように思います。そうした状況において、本人が、「これがしたいんだ」と何らかんに対して意欲を示した時に、その有り様を「また一時的なことか…」と縮めてしまうのではなく「コミットメント」としていかにキャッチすることができるのか、あるいは、コミットメントをキャッチできたと思えるのか、つまり、本人のこうしていきたいという気持ちを信じることができるかどうか重要であると考えます。そして、そんなふうに通コミットメントをキャッチできた時に、家族に、あるいは家族と本人の関係に、どのようなこと（変容）が起こっているのだろうか、と考えました。この点について、質問させていただきます。

和田先生のご発表と対比させますと、ひきこもりを支援する立場としての家族に焦点をあてておられました。ただ現状としてひきこもっているということ

があるなかで、もしかすると、結果として家族の有り様がひきこもりを強化している、ということがあるかもしれません。ひきこもりを維持してしまっているかもしれない家族という視点を導入したときに、どのようなことが見えてくると思いますか。ひきこもりを維持している家族システムといった観点からおうかがいしたいと思います。

長坂先生のご発表に関しては、当事者が、友人や親や所属集団との関係性をうまく築くことのできない状況にありながら、その関係を新たに築き直したり、所属集団への帰属感を得ようと奮闘している有り様をシステムと捉え、その様相を描き出そうとされているものと理解しました。そして、「偽りのストーリー」という表現がありました。偽りのストーリーを語りながらも社会に適応しようとするプロセスを捉えようとしているのだと考えました。「身体に関するストーリー」「心理状態、社会との繋がりに関するストーリー」「偽りのストーリー」という3つのストーリーがあり、「身体に関するストーリー」と「心理状態、社会との繋がりに関するストーリー」とでつくりあげられるストーリーと相反するものとして、「偽りのストーリー」が語られていると分析されているのだと理解しましたが、社会に適応しようとするプロセスであるという意味では、「身体に関するストーリー」と「心理状態、社会との繋がりに関するストーリー」を、「偽りのストーリー」に組み込みながら物語化がなされているのではないかと考えました。いかがでしょうか。その点について、長坂先生がどう認識されているのか、お聞かせいただきたく思います。

以上、指定討論とさせていただきます。